

子育てにおける協働〜NPO活動の事例から〜

NPO法人わははネット理事長 中橋 恵美子

協働を呼び掛けるポイント

最近、協働ブーム(?)なのか、地域で子育て支援をしているグループやネットワークが対象の勉強会やセミナーでも「行政との協働」や「企業との協働」がテーマにされています。私はまず、頭で堅苦しく、難しく考えず、相手が行政だろうが、地域だろうが、企業だろうが、あまり意識しないことが大事なのだと思います。目の前にいる親子のために自分たちに何ができるか? 何が足りないか? 足りないのなら、どこを手を組めばその問題が解決するのか? を考え、動くだけです。

しかし、自分とは違う相手に同じ目的(子育て支援)で動いてもらおうと思えば、相手に呼び掛けるべきポイントは少し意識しています。

①まず、相手にとっても、デメリットにならない、というストーリーを作ることです。もちろんそのストーリーがでたらめでは、継続して協働の事業が行えませんから、実現できるストーリー、相手も私たちも、そして何より子育て中の人たちが喜べる「WIN-WIN」のストーリーを、まずは頭に描くことからスタートします。

②次に相手が理解しやすいようなデータをそろえることです。例えば、困っている親子がこれくらいいる、こういう効果が期待できる、ということなどを漠然と伝えるのではなく、自分たちの地域でアンケートやヒアリングをして用意することは大事な作業だと思います。それでは、私たちが企業と一緒に取り組んでいる子育て支援活動を2つ紹介し



ましよう。

事例(1)子育てタクシー®の取り組み

「ある日、わはは広場(商店街空き店舗で私たちが運営する常設の子育て広場)に遊びに来ていた親子が出産の時、破水してタクシーに乗ろうとした。しかし、羊水を押さえるため股の間にタオルを挟んでいる姿を見た運転手に「俺の車のシートを汚すなよ」と言われ、その一言で出産が辛い思い出になってしまった」。

この話を聞いたことがきっかけとなりました。その後も、「小さい子どもとタクシーに乗ったが騒ぐ子どもと運転手に気を使い、疲れてしまう」、「母親の急用で保育園に迎えに行けないとき、運転手を安心して任せられるプロ(つまりタクシー)が、お迎えに行ってくれたらいいのに」、といういくつかの声を聞いたことで、私たちにできない「ドア・ツー・ドア」のサービスができるタクシーが子育てにもっと優しい乗り物に変われば、子育て全体がよくなるのではないか?! と思ったのです。

そこで私たちはアンケートとヒアリングをお母さんたちに実施し、結果を持ってタクシー業界へアプローチしました。



▲子育てタクシードライバー養成講座での救命実習。



▲子育てタクシーでチャイルドシートを装着する風景。



▲モデルルームでの
子育て広場の様子。



◀モデルルームには地域や行政の
子育て情報コーナーがあります。

うよよせつ
紆余曲折ありましたが現在、「子育てタクシー」とは、

●運転手が子育てタクシードライバーとしての研修（2日間プラス実習）を実施すること、●登録制にすること、●分かりやすい表示をすること、●リスクマネジメントをし、子育てタクシー保険（オリジナル）への加盟の義務付けなどを行い、

◎親子連れに優しく、◎子どもだけの送迎も安心して任せられ、◎地域の子育て団体とも連携して、子育てタクシー業務を実施しています（2007年12月現在、全国で47社、約5000人の子育てタクシードライバーが活躍中）。

移動に不便を感じていた大勢の親子が喜んでくれたことは実施してよかったことの一つですが、それ以外にもうれしいことがあります。

「雨の日も入り口まで傘をさして迎えに来てくれてベビーカーをたたみ、荷物を全部持ってくれた上に優しく声を掛けてくれて、本当にうれしかった。ありがとうございます」などの感謝の手紙を、ドライバ―が子育て中の方からたくさんもらいはじめたこと。保育園への送迎で利用しているお子さんが園の七夕飾りに「わたし、うんでんしゅさんになりたい」と書いてくれたこと。このような目に見える反応により、「仕事に対する誇りを持ち、業界のイメージアップにも貢献した」とタクシー会社に喜ばれ、その結果として、子育てタクシーが一地域、一社の取り組みにとどまらず、全国へと広がってきているのだと確信しています。そして何より、今まであまり子育てに関心なかった運転手さんたちが、普段の生活の中でも親子を意識し、優しくなってきた

いることを実感します。

事例(2)マンションモデルルームでの子育て広場

地元のマンションデベロッパ―と一緒に、私たちは子育てに優しいマンションブランドの構築を手掛けました。その後、そのブランドのモデルルームを見たときに、広い駐車場、若い世帯の多い立地、平日の日中はほとんどお客さん

がない、空調の効いた広々としたモデルルームで子育て広場ができないか？と提案しました。

新興住宅地で若い世帯が多いにもかかわらず、近隣に子どもが遊べる場所がほとんどないエリアだったため、ニーズがあるのは確信していましたが、私たちもボランティアという訳にはいきません。そこで経費の見積もりや、予想される反響を紙に書いて打ち合わせました。

週に1回、平日に開催するモデルルームでの広場には毎回100人を超える親子が遊びに来ます。近隣に遊び場のなかった親子は、ここで私たちスタッフに子育ての相談をし、仲間作りをし、大好評です。また、そのクチコミ効果も大きく、子育てに優しいということ企業イメージもアップしました。

うれしいのは、独身のマンション営業マンたちがときどき広場を手伝い、子育ての喜びを共有する中で、「どんな研修よりも役に立った」と言ってくれることです。「偶然、広場で最初の一步を踏み出したというお子さんを見て、涙が出るほどうれしかった」、「異動で転勤になるときに、遊びに来ていたお母さんから、「一緒に記念写真を撮ってほしい」と言われるほど、子どもに懐かれてうれしかった」など、営業マンとしての成長につながったと喜びの声を寄せてくれます。

企業人とはいえ、地域の人でもあり、家庭に帰れば家庭人でもあります。「この人たちは自分とは違う異質なもの」と考えるのではなく、同じ地域の人として、よりよい子育て社会のために、互いにとつてもメリットのある形で協働できるヒントは、毎日の子育ての現場の中にたくさんあるのではないのでしょうか。

企業のためだけの目線ではなく、NPOのためだけの目線ではなく、親子にとって何が必要で何が困っているのか、ここに軸を置いていれば協働作業はぶれることなく、よりよい事業展開ができるのでは、と思っています。

なかはし えみこ 1968年香川県生まれ。1998年、育児サークル輪母ネットを結成。香川県初の地域密着型子育て情報誌の発行のほか、商店街の空き店舗を使った子育ての広場の運営、子育てタクシ―を提案。全国子育てタクシ―協会事務局長、NPO法人全国子育てひろば連絡協議会理事、NPO法人たかまつ男女共同参画ネットワーク理事などを歴任。中学1年、小学6年、小学2年の3児の母。